

今年も八月十五日が日本にやって来る。日中国交が回復してから三十年経過する。日本企業の対中進出は今年も拡大の一途をたどっている。中国の労賃の安さや国内市場の大きさといった経済メリットのみに注目し、中

# 潮流

国の民族意識への配慮が不足している面があるように思われるので、中国における「靖国問題」を取りあげてみたい。  
司馬遷が著した中国の歴史文献「史記」の伍子胥(ごししよ)伝に載っている「死屍(しし)に

黒住 昭夫

ジェット口境港F A Z支援センターアドバイザー



## 中国との死生観の違い

「靖国問題」

鞭(むち)打つ話を紹介しよう。中国の春秋戦国時代、呉王・僚の十年(BC五一六)、隣国楚の平王が死亡した。父と兄を平王に殺され、呉から楚に命からがら亡命していた軍師・伍子胥は、平王に対し復仇の強い意志を持ちつつけていた。  
平王の死後六年、伍子胥は念願となって呉軍を率いて楚の都を制圧した。当然の事ながら平王の墓は暴かれ、十年前に

死去した平王の屍体(し)二人の墓はない。周・鄧氏の遺言により、父と兄が殺されてから十六年の月日が経過していた。伍子胥は繰り返して、死後十年経った死体は空気にさらされて、ポロポロになり、灰色になった肉の粉が舞い上がったのである。  
史記は言う。「これを遺灰は天と海に散る事こそ、最も革命家の生涯に

やむ(三百回鞭で叩いてやっとなめた)と言うのである。中国の歴史でどこでも転がっている話である。さらにもうひとつ、中国建国の重要人物で中国人から深い思慕を寄せられている周恩来氏。毛沢東、周恩来氏亡き後、経済建設路線を遂行し、現在の経済改革を実現した鄧小平氏。この

国・日本とでは、基本的な死生観が違う。靖国神社にはA級戦犯が祭られている。「日本

の指導者が参拝すれば問題が複雑になる」と江沢

民主席は言うが、日本の死生観では複雑にはならないのである。靖国問題でも外交問題でもなく、死生観の違い

中国市場では世界の有力企業と台頭著しい中国地場企業との間で激しい競争が始まっている。この中で日本企業にはまず歴史問題というほかの競争相手にはないハンディがある事を考慮しなければならぬ。トラブルが発生した場合、日本企業

(境港市)